

令和 6 年 5 月 29 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12536

研究課題名（和文）戦間期ドイツにおける義勇軍経験と反ファシズムの主体形成：暴力のヨーロッパ史再考

研究課題名（英文）Freikorps Experiences and Making of Antifascist Subjects in Interwar Germany

研究代表者

今井 宏昌（Imai, Hiromasa）

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：00790669

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ヴァイマル初期のドイツで活動した志願兵部隊・義勇軍の経験と、そこで培われた「暴力を辞さないアクティビズム」が、戦間期全体を通じ反ファシズムの主体形成にどのように作用したのかを検討することにより、「暴力のヨーロッパ史」研究の再考や戦間期という時代の再評価に寄与することを目的とするものである。成果としては、義勇軍（Freikorps）出身のナチでありながらも、最終的にドイツにおける反ナチ抵抗運動、あるいはフランス・スペインにおける人民戦線への支援に携わったボード・ウーゼやアレクサンダー・シュテンボック＝フェルモアに関する研究を中心に、4本の論文、2冊の共著、1冊の共訳書を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の最大の成果は、義勇軍出身の右翼作家、アレクサンダー・シュテンボック＝フェルモアの著作活動と、そこにおける共産主義への「転向」の契機を、彼の自伝的小説や社会ルポルタージュの分析を通じて明らかにした点にある。義勇軍とその経験が多様な政治的方向性を持つことは、すでに先行研究でも明らかにされてきたが、本研究は義勇軍 右翼 共産主義という政治的道程を、シュテンボック自身の義勇軍経験と労働（者）経験の混交という視点から具体的に跡づけるとともに、そこに男性性や女性観といったジェンダーの視点からの分析を加えた点で、世界的に見ても新規性をもつといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project is to examine how the experience of the Freikorps in early Weimar Germany and the “activism without violence” derived from it acted to shape the subject of anti-fascism in the interwar period. This work should prompt a reconsideration of recent studies of the “European history of violence” and, by extension, contribute to a reappraisal of the interwar period. This project elucidates the activities of Bodo Uhse and Alexander Stenbock-Fermor in the Weimar Republic. They were both from the Freikorps and initially belonged to the Nazi or political right wing, but eventually became involved in the anti-Nazi resistance movement in Germany and in support of the Popular Front in France and Spain. The results of the research include four articles, two co-authored books, and one co-translated book.

研究分野：ドイツ現代史

キーワード：義勇軍 ナチズム コミュニズム 反ファシズム ヴァイマル共和国 暴力 経験史 人民戦線

1. 研究開始当初の背景

背景：ドイツ義勇軍をめぐる問題 第一次世界大戦直後のヨーロッパ、特にドイツや中東欧では、革命闘争や民族・領土紛争が各地で勃発した。社会学者 N・エリアスは、こうした国家権力の弱体化に伴う民間暴力の台頭に戦間期ドイツの不安定さの根源を見出し、さらにはその先にナチズムの台頭を位置づけた【N. Elias, *Studien über die Deutschen*, 1989, 邦訳 1996】。確かに、当時のドイツでは革命の喧騒の中で志願兵部隊・義勇軍 (Freikorps) が結成され、国内の治安維持や東部での対ポーランド国境闘争、バルト地域での対ポリシェヴィキ干渉戦争を正規軍に代わり担った。そしてその一部は反共和国の右翼テロリストとなり、外務大臣 W・ラーテナウをはじめとする政府要人の暗殺を展開することとなる。歴史学者 R・G・L ウェイトは、こうした義勇軍のもつ暴力性とナチ党への人的連続性に注目し、その実態を「ナチズムの前衛」と評価した【R. G. L. Waite, *Vanguard of Nazism*, 1952, 邦訳 2007】。この評価は基本的に、ドイツ現代史研究・ナチズム研究において、今なお支配的な影響力を及ぼしている。

申請者のこれまでの研究：暴力の経験史 これに対し申請者は、義勇軍をその当事者に共通する「経験」と位置づけることで、新たな分析視角の提示をおこなうと同時に、義勇軍への再評価を試みた。具体的には、ナチ、共和派、コミュニストといったように、相異なる政治的道程を歩むに至った複数の義勇軍戦士の個人史を比較検討し、義勇軍経験がナチズムだけでなく、反ナチ抵抗運動につながる方向性を有していた点を明らかにした。またさらには、義勇軍経験がその当事者にもたらした最大公約数的な特徴として、「暴力を辞さないアクティヴィズム [gewaltbereiter Aktivismus]」の存在を確認し、それが政治的な右左にかかわらず、ヴァイマル共和国における広範な勢力の政治文化を規定していた可能性を指摘した。

ただし、博士論文をもとにした著書『暴力の経験史』(2016)では、対象時期を義勇軍運動が終結する 1923 年 9 月までとしたため、義勇軍経験および「暴力を辞さないアクティヴィズム」が、その後どのように展開したのか、特にその反ファシズム運動との関係について、具体的な検討をおこなうまでには至らなかった。また反ファシズム運動に合流した義勇軍出身者の中には、ナチ党その他の右翼組織を一度経由した者が殆どである。しかし彼らがなぜ、いかなるプロセスを経て反ファシズムへの「転向」を果たしたのかも、十分に解明することができなかった。

2. 研究の目的

義勇軍経験と反ファシズムの形成 それゆえ本研究では、戦間期 (1918-1938) 全体を通じ、義勇軍経験および「暴力を辞さないアクティヴィズム」が、反ファシズムの主体形成にどのように作用したのかを検討することとした。具体的には、申請者のこれまでの研究とその反省点を踏まえ、義勇軍出身のナチまたは右翼でありながらも、最終的にフランスやスペインにおける人民戦線への支援や、ドイツにおける反ナチ抵抗運動に携わった人びとの経験を歴史的に分析することを目指した。対象となるのは、B・ウーゼ、R・シェリンガー、E・オットヴァルト、A・シュテンボック=フェルモアといった面々である。

「暴力のヨーロッパ史」再考 近年の欧米歴史学界では、第一次世界大戦後の政治的暴力を第二次世界大戦との連続性の中で捉え、その経験にホロコーストに代表される大量殺戮の起点を見出そうとする「暴力のヨーロッパ史」の議論がさかんである【D. Bloxham, *The Final Solution*, 2009; T. Snyder, *Bloodlands*, 2010, 邦訳 2015】。ただし、こうした議論が単線的歴史過程を過度に強調している点は否めない。そこでは暴力経験が次なる憎悪や殺戮につながるものが前提とされており、また巨視的には、戦間期という時代が二つの世界大戦をつなぐ、いわばストローのような媒介項として位置づけられている。したがって、戦間期ドイツにおいて政治的暴力の行使主体となった義勇軍出身者の経験分析を通じ、そこから反ファシズムへの道が生起する過程を検討する本研究は、単線的な「暴力のヨーロッパ史」の再考を促し、ひいては戦間期という時代の再評価にも寄与するものである。

3. 研究の方法

経験史の分析視角 分析に際しては、申請者がこの間培ってきた「経験史 [Erfahrungsgeschichte]」の分析視角を採用した。経験史とは、歴史主体が社会的現実をどのように知覚・認識・解釈し、さらにはそれを受けてどのような行為に及んだかを問題とする歴史学のいち分野である。そこでは「体験 [Erlebnis]」と「経験 [Erfahrung]」が明確に区別され、前者がリアルタイムで生じた知覚的印象、後者がその事後的解釈と定義される。また解釈のあり方は、主体の置かれた外的な状況・構造とのかかわりの中で絶えず変化し、さらにはその解釈に準ずる形で、次に何が起きるかという将来への期待、いわば行為への指針も変化していきと考えられ

る。つまり経験史の主眼は、「体験→解釈→期待→行為→体験…」という絶えざる円環運動を前提とした、主体の内的世界と外的構造との相互作用の分析にある。

対象人物 以上の方法論を踏まえ、本研究では、以下に挙げる人物を検討対象に据えた。

- (a) ボード・ウーゼ (1904-1963): 義勇軍に参加後、ナチ党所属のジャーナリストとして活躍していたが、1930年にナチ党と決別しドイツ共産党 (KPD) に協力。ナチ政権成立後はフランスに亡命し、1935年には亡命 KPD に入党。1936年にスペイン内戦の国際旅団に参加し、第二次世界大戦中はメキシコ亡命、戦後は東独を代表する作家・政治家になった。
- (b) リヒャルト・シェリンガー (1904-1986): 義勇軍に参加後、正規のドイツ軍たる「国軍 [Reichswehr]」の将校となり、ナチ・クーデタへの協力を約束した罪で 1930年に逮捕される。しかし KPD の説得により「転向」と入党を果たした後は、同党のナチ党切り崩し戦術の象徴的存在となる。戦後は西独を代表する共産主義作家・政治家となった。
- (c) アレクサンダー・シュテンボック=フェルモア (1902-1972) とエルンスト・オットヴァルト (1901-1943): 両名ともに義勇軍参加後、反共右翼の立場にありながら、KPD に接近し入党した。その後は回想録などで反省的に半生を綴りながら、ナチ党員や右翼青年に反ファシズム陣営への「転向」を訴えた。1933年以降は反ナチ抵抗運動の一角を担う。

同じ世代、異なる経験 これらの人物は全員、1900年代に生まれ、第一次世界大戦と戦後の内戦状況の中で自己形成を遂げた、いわゆる「戦時青少年世代」に属する。この世代は従来、H・ヒムラーや、R・ハイドリヒといったナチ高官を多数輩出したことから、ホロコーストにつながる過激な主義主張や政治的暴力の担い手として、ナチズム研究で注目を集めてきた【M. Wildt, *Generation des Unbedingten*, 2002】。それゆえこの「戦時青少年世代」に属し、なおかつヒムラーやハイドリヒと同様に義勇軍における暴力経験を有しながらも、ナチのホロコーストの行使主体になることなく、最終的に反ファシズムの立場を明確にした人びとに光を当てることは、従来の世代論・世代史研究で十分になされてこなかった、同一世代内で生じる経験の差異を解明するための方法論の確立にもつながる。論点となるのは、①彼らがどのように義勇軍を経験し、②それが反ファシズムへの「転向」といかなる関係にあり、③その経験が反ファシズム運動の形成にいかなる形で作用したのかである。

史料・アプローチ 当初、主たる対象人物に設定したのは、(a)と(b)であった。(c)の二名はナチ党員ないしナチ・シンパたる(a)(b)の「転向」を背後から促した人物であり、(a)(b)の経験を分析する際の参照軸として設定した。しかし、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の世界的流行にともなうドイツでの史料調査の中断、ならびに(a)に関するオランダ語博士論文【G. Borsten, “Vom Hakenkreuz zum Sowjetstern”, 2021】の登場にともない、方針を大きく変更せざるを得なくなった。その結果、すでに関連史料の調査・収集が完了しており、なおかつ研究の手薄な(c)のシュテンボックを軸とする方向へと舵を切るに至った。

経験史の分析視角を導入する際、最も重要な史料は、歴史主体が自らの経験を綴った日記、書簡、回想録などのエゴ・ドキュメントである。シュテンボックの場合、バルト地域での義勇軍闘争終結後にラトヴィアからドイツに亡命し、1922年から23年にかけてルール地方での炭鉱労働に従事した。彼はそうした自身の経験をもとに、第一作『わが鉱夫体験 [Meine Erlebnisse als Bergarbeiter]』(1928)や、第二作『志願兵シュテンボック [Freiwilliger Stenbock]』(1929)といった自伝的小説を発表したほか、第三作としてドイツ各地のプロレタリア地域をめぐる社会ルポ『下からのドイツ [Deutschland von unten]』(1931)を世に問い、さらにその死後には、自伝『赤い伯爵 [Der rote Graf]』が刊行された。ただし、これらの著作だけでは、彼をめぐる外的構造や事実関係の検証が不十分となるため、分析に際しては、ドイツ連邦文書館に所蔵される官憲側の記録やドイツ共産党 (KPD) 関係史料を調査し、それらと照合する形で自伝的小説や社会ルポの読解をおこなった。

4. 研究成果

研究成果1: シュテンボック研究 最大の成果は、シュテンボックに関する論文2本により、彼の義勇軍経験と「転向」経験の解明に成功したことである。まず、「戦間期ドイツの「赤い伯爵」における義勇軍経験」(『歴史評論』843号、2020掲載)では、主に『志願兵シュテンボック』の分析をおこない、その結果、共産主義へ接近・「転向」した勇軍出身者たるシュテンボックの経験においても、K・テーヴェライトが義勇軍出身者に見出した「兵士的男性」としての特性、つまりは男同士のホモソーシャルな関係への傾倒と「女性に対する愛憎矛盾する攻撃性」が確認され、それがヴァイマル共和国の政治文化と共振していた可能性を明らかにすることができた。また「ヴァイマル末期における「赤い伯爵」と労働者世界」(水野博子/川喜田敦子編『ドイツ国民の境界』山川出版社、2023所収)では、『わが鉱夫体験』でシュテンボックが自覚的に描いた社会的「境界」、つまりは貴族である自分と炭鉱労働者との間の階級的差異が、次作となる社会ルポ『下からのドイツ』の中でどのようにゆらぎ、再定義されたのか、ま

たその動きと彼自身のコミュニストへの「転向」、いわば政治的「越境」がいかなる関係にあったのかを分析した。両論文を合わせた結論としては、主人公の労働者世界との邂逅を描く『わが鋳夫体験』、主人公が戦争の恐怖に目覚めていく『志願兵シュテンボック』といった自伝的小説、そしてバルト・ドイツ貴族の青年が労働者世界との再会を通じ、コミュニズムへの信念を強めていく社会ルポ『下からのドイツ』は、いずれもビルドゥングスロマンの性格を有しており、特に『わが鋳夫体験』の段階では現象レベルにとどまっていた社会的「越境」が、『下からのドイツ』においては意識レベルで達成されたことは、その後のシュテンボックの政治的「越境」にとって間違いなく重要な背景をなしていたこと、ただし、そのような労働者世界との邂逅・再会を通じた段階的な社会的「越境」の語りは、同じくナチからコミュニストへと「転向」したシェリングーを称える KPF の「シェリングー路線」にほとんど生かされず、むしろこの路線は、シェリングーのような「反革命の兵士」が「革命の兵士」へと「転向」することに重きを置いており、そこではシュテンボックが自覚したはずのプロレタリア性や、彼にそれを気づかせた導き手としての炭鋳労働者の姿は背景に退いてしまったことを明らかにした。

研究成果 2：住民軍研究 また「ドイツ革命期における「武装せる市民」」『軍事史学』56巻4号、2021 掲載では、義勇軍とその経験を同時代の文脈の中に位置づけるべく、1918/19年のドイツ革命期に編成された地域住民主体の志願兵部隊・住民軍（Einwohnerwehr）の実態を、プロイセン州ザクセン県の都市ハレを事例に明らかにした。義勇軍が行使した左翼急進派への政治的暴力をヴァイマルの「建国暴力」と捉え、その分析を試みた M・ジョーンズの「ドイツ革命と暴力」研究は、G・L・モッセの「政治の野蛮化／残忍化」テーゼとその再検討を踏まえた研究として、重要な意義をもつ。しかしながら、ジョーンズの研究には、首都ベルリンの事例の一般化、義勇軍以外の志願兵部隊の捨象、義勇軍の暴力からナチ暴力への単線的連続性の強調、といった問題が指摘されている。そこで本論文では、ベルリンとは異なり 1918 年末まで暴力的な紛争が起きなかったザクセン県の工業都市ハレでの革命を事例に、義勇軍と同時に登場した住民軍の編成過程、階層構成、そして組織としての性格を明らかにすることで、ジョーンズの議論の相対化を図りつつ、「政治の野蛮化」や「暴力の連続性」をめぐる問題の再考を試みた。結論としては、ハレ住民軍の存在はハレ市民層における政治的暴力の受容と積極的行使の証左とはいえ、さらには中高年を中心とするその人的構成を踏まえた場合、ナチ期への連続性よりも帝政期ないしそれ以前からの連続性の方が重要であることが明らかとなった。

研究成果 3：義勇軍の政治思想研究 さらに、「ドイツ義勇軍運動の残照と「第三の国」」（『史淵』161 輯、2024 掲載）では、ウーゼが所属していた義勇軍の後継組織「オーバーラント同盟（Bund Oberland: BO）」に注目し、そこでミュンヘン一揆挫折後に掲げられた政治思想について分析した。義勇軍（とその経験）の多様性については、J・Ph・ボンブルンによる最新の社会史研究によっても明らかにされたが、BO はそれを体現するような組織であった。すなわち、そこからはのちのナチ高官と反ナチ抵抗運動の闘士の双方が輩出されるとともに、その政治思想たる「第三の国（Das Dritte Reich）」も、ナチズムに必ずしも収斂するものではなく、むしろソヴィエト・ロシアとの提携を志向する民族思想としての「ナショナル・ボルシェヴィズム [Nationalbolschewismus]」へと至る方向性を有していた。そこで本論文では、これまで情報が不確定なまま先行研究で言及・検討されてきた BO 機関誌『第三の国』の成立過程を一次史料にもとづいて検討し、そこにおける「第三の国」思想の形成と変容を明らかにした。その結果、当初は大ドイツ主義的ナショナリズムにもとづく有機的共同体として明確な像を結んでいた「第三の国」が、曖昧かつ抽象的なユートピアへと変貌していくプロセスそのものが、ミュンヘン一揆の挫折と組織の非合法化に直面し、危機からの再起をはかるも、ヴァイマルの「相対的安定期」が始まる中で、否応なしに政治化を迫られ苦悩する BO の姿の反映であることがわかった。

研究成果 4：戦後日本のヴァイマル共和国研究再考 上記の成果と並行して、「ヴァイマルと向き合う」（『ドイツ研究』54号、2020 掲載）では、戦後日本のドイツ研究にみられた、ヴァイマル共和国の歴史を戦後日本の教訓として位置づける姿勢を、便宜的に「教訓の共和国」と名づけたうえで、それが 1945 年から 2015 年までに間にどのような形で表出し、またどのような変遷を辿ったのかを、ヴァイマル共和国に関する日本語文献、とりわけその「まえがき」や「あとがき」などを中心に検討していった。当該分野における類似の研究は皆無であるほか、ヴァイマル共和国をめぐる欧米の研究や問題関心を日本の研究者や知識人がどのように受容し、「領有」していったのかを明らかにすることで、西洋（史）研究や外国（史）研究がもつ意義を問い直す機会を改めて提供した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 58
2. 論文標題 書評 衣笠太郎著『ドイツ帝国の解体と「未完」の中東欧 第一次世界大戦後のオーバーシュレージエン / グルニツシロンスク』	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ドイツ研究	6. 最初と最後の頁 115-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57301/deutschstudien.58.0_115	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 161
2. 論文標題 ドイツ義勇軍運動の残照と「第三の国」 ヴァイマル中期におけるオーバーラント同盟とその機関誌をめぐって	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 史淵	6. 最初と最後の頁 33-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 50
2. 論文標題 はじめに 趣旨説明 (特集 中・東欧史から世界史を考える 「王のいる共和政」からポスト社会主義へ)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州歴史科学	6. 最初と最後の頁 61-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 45
2. 論文標題 書評 林忠行著『チェコスロヴァキア軍団 ある義勇軍をめぐる世界史』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東欧史研究	6. 最初と最後の頁 120-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 60
2. 論文標題 趣旨説明(シンポジウム報告「ホロコースト・空襲・公民権運動 マリオン・イングラムの経験と記憶をめぐって」(2022年度春季大会))	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 西洋史学論集	6. 最初と最後の頁 109-110
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 49
2. 論文標題 書評 長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 九州歴史科学	6. 最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ベンヤミン・ツィーマン(今井宏昌/西山暁義訳)	4. 巻 66
2. 論文標題 戦時暴力を考える 第一次世界大戦初期におけるドイツ軍の残虐行為	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代史研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.20794/gendai-shi-kenkyu.66.0_1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 66
2. 論文標題 書評 中島浩貴『国民皆兵とドイツ帝国 一般兵役義務と軍事言説1871~1914』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代史研究	6. 最初と最後の頁 39-45
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.20794/gendai-shi-kenkyu.66.0_39	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 56 (4)
2. 論文標題 ドイツ革命期における「武装せる市民」 ハレ住民軍を事例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 56-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 47
2. 論文標題 はじめに 趣旨説明 (特集「大戦後」を考える ヴェルサイユ条約調印一〇〇周年の地平から)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 九州歴史科学	6. 最初と最後の頁 107-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 47
2. 論文標題 ドイツ史からみたアイルランド革命 (特集「大戦後」を考える ヴェルサイユ条約調印一〇〇周年の地平から)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 九州歴史科学	6. 最初と最後の頁 143-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 57
2. 論文標題 書評 剣持久木編 『越境する歴史認識 ヨーロッパにおける「公共史」の試み 』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西洋史学論集	6. 最初と最後の頁 46-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 54
2. 論文標題 ヴァイマルと向き合う 戦後日本のドイツ研究における「教訓の共和国」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ドイツ研究	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 843
2. 論文標題 戦間期ドイツの「赤い伯爵」における義勇軍経験	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 42-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 パトリック・ヴァーグナー (今井宏昌訳)	4. 巻 18
2. 論文標題 「古参闘士」の最後の戦場 第二次世界大戦最後の数ヶ月におけるナチ活動家の孤立・共同体形成・暴力	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ヨーロッパ研究	6. 最初と最後の頁 33-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/0002000542	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 53
2. 論文標題 書評 竹本真希子著『ドイツの平和主義と平和運動 ヴァイマル共和国期から1980年代まで』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ドイツ研究	6. 最初と最後の頁 95-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井宏昌	4. 巻 829
2. 論文標題 書評 高橋秀寿著『ホロコーストと戦後ドイツ 表象・物語・主体 』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 104-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計33件 (うち招待講演 7件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 コメント：ドイツ史の観点から
3. 学会等名 九州大学人社系協働研究・教育コモンズ、人社系学際融合プログラム共同企画・「歴史総合」時代のロシア史： ロシア史教育の日露比較
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 第一次世界大戦と「第三の国」 ヴァイマル期ドイツ・パラミリタリ組織の政治化をめぐって
3. 学会等名 第8回「第一次世界大戦と「戦争文化」」科学研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 世界史の中のヴァイマル共和国 近年の研究動向から
3. 学会等名 2023年度九州史学会大会シンポジウム《共和国の20世紀史》
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 趣旨説明
3. 学会等名 2023年度九州史学会大会シンポジウム《共和国の20世紀史》
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 ドイツ義勇軍運動の残照と「第三の国」 ヴァイマル中期におけるオーバーラント同盟とその機関誌をめぐって
3. 学会等名 2023年度広島史学研究会大会西洋史部会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 趣旨説明
3. 学会等名 九州西洋史学会2022年度春季大会 / 九州歴史科学研究会4月例会・シンポジウム「ホロコースト・空襲・公民権運動 マリオン・イングラムの経験と記憶をめぐって」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 ドイツ共和派の暴力文化？ ヴァイマル共和国における黒・赤・金の国旗団をめぐって
3. 学会等名 ヨーロッパ地域史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 趣旨説明
3. 学会等名 公開シンポジウム・九州歴史科学研究会2022年9月例会 「中・東欧史から世界史を考える：「王のいる共和政」からポスト社会主義へ」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 趣旨説明
3. 学会等名 九州大学人社系協働研究・教育コモンズ第14弾企画／第11回シンポジウム「ロシア・ウクライナの歴史と文化を考える」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 ドイツ義勇軍研究の視点から
3. 学会等名 東欧史研究会2022年度第3回例会／九州歴史科学研究会10月例会／九州西洋史学会2022年度秋季大会・書評会 「林忠行氏『チェコスロヴァキア軍団 ある義勇軍をめぐる世界史』(岩波書店、2021年)」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 ドイツ兵と「特殊俘虜」 第一次世界大戦期日本の俘虜収容所における「箱庭の民族問題」
3. 学会等名 ドイツ現代史研究会12月例会・連続フォーラム：日本にあるドイツ・オーストリア現代史
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 市民層の「野蛮化」？ ドイツ革命期におけるハレ住民軍をめぐって
3. 学会等名 第25回ワークショップ西洋史・大阪
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 ヴァイマル期ドイツ義勇軍運動と「第三の国」
3. 学会等名 第1回「第三の国」科研研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 追悼と闘争のあいだ ヴァイマル期ドイツ共和派退役軍人団体をめぐって
3. 学会等名 第2回「第一次世界大戦と「戦争文化」」科研研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 趣旨説明
3. 学会等名 九州歴史科学研究会10月例会・合評会：熊野直樹『麻葉の世紀：ドイツと東アジア 一八九八-一九五〇』（東京大学出版会、2020年）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 趣旨説明
3. 学会等名 第31回西日本ドイツ現代史学会・小シンポジウム「ドイツ近現代史のひらき方 「一國史」の枠を超えて 」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 趣旨説明
3. 学会等名 第31回西日本ドイツ現代史学会・合評会「原田昌博『政治的暴力の共和国 ワイマル時代における街頭・酒場とナチズム 』（名古屋大学出版会、2021年）をめぐって」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 コメント1
3. 学会等名 第31回西日本ドイツ現代史学会・合評会「原田昌博『政治的暴力の共和国 ワイマル時代における街頭・酒場とナチズム 』（名古屋大学出版会、2021年）をめぐって」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 「不浄なるもの」との闘争 20世紀ドイツにおける感染症の恐怖と敵の像
3. 学会等名 九州大学アジア・オセアニア研究教育機構（Q-AOS）シンポジウム「感染症と生きる：コロナから学ぶ持続可能な社会とは」異分野融合セッションB「生活」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 戦間期ドイツ義勇軍文学と「男らしさ」 『志願兵シュテンボック』をめぐって
3. 学会等名 西日本日独協会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 趣旨説明
3. 学会等名 九州歴史科学研究会2019年6月例会・シンポジウム 「「大戦後」を考える ヴェルサイユ条約調印100周年の地平から 」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 ドイツ史からみたアイルランド革命
3. 学会等名 九州歴史科学研究会2019年6月例会・シンポジウム 「「大戦後」を考える ヴェルサイユ条約調印100周年の地平から 」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 ヴァイマルと向き合う 戦後日本のドイツ研究における「教訓の共和国」
3. 学会等名 第35回日本ドイツ学会大会シンポジウム「ヴァイマル100年 ドイツにおける民主主義の歴史的アクチュアリティ 」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 「転向」をめぐる経験空間 ヴァイマル末期ドイツ共産党の「シェリングー路線」をめぐる
3. 学会等名 ヨーロッパ地域史研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 戦間期ドイツの「赤い伯爵」 アレクサンダー・シュテンボック=フェルモアの「転向」
3. 学会等名 第3回ドイツ語圏近現代史研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 書評会コメント ローベルト・ゲルヴァルト著 / 小原淳訳 『敗北者たち 第一次世界大戦はなぜ終わり損ねたのか 1917-1923』 みすず書房、2019年2月。
3. 学会等名 ドイツ現代史研究会2019年12月例会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 コメント（セッション パネル・ディスカッション「文理融合教育の課題」）
3. 学会等名 シンポジウム「情報ガバナンスと文理融合教育の課題」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 ドイツ革命期の「武装せる市民」 ハレの住民軍を事例に
3. 学会等名 鍋谷科研第7回研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 ヴァイマル期ドイツにおけるボード・ウーゼの彷徨 右翼青年からコミュニストへ
3. 学会等名 第116回トーマス・マン研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 書評会コメント 高橋秀寿『ホロコーストと戦後ドイツ 表象・物語・主体』（岩波書店、2017年）
3. 学会等名 ドイツ現代史研究会10月例会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 戦間期ドイツにおける右翼青年と「革命」 ボード・ウーゼにおけるコミュニストへの道
3. 学会等名 ヨーロッパ地域史研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 趣旨説明
3. 学会等名 第29回西日本ドイツ現代史学会・合評会「佐藤卓己『ファシスト的公共性 総力戦体制のメディア学』(岩波書店、2018年)をめぐって」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今井宏昌
2. 発表標題 街頭政治の視点から
3. 学会等名 第29回西日本ドイツ現代史学会・合評会「佐藤卓己『ファシスト的公共性 総力戦体制のメディア学』(岩波書店、2018年)をめぐって」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 水野博子 / 川喜田敦子編、山根徹也 / 平松英人 / 佐藤紀 / 今井宏昌 / 磯部裕幸 / 穂山洋子 / 伊東直美 / 伊豆田俊輔 / 柳原伸洋 / パトリック・ヴァーグナー 著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 320
3. 書名 ドイツ国民の境界 近現代史の時空から	

1. 著者名 ローレンツ・イエーガー (長谷川晴生 / 藤崎剛人 / 今井宏昌 訳)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 386
3. 書名 ハーケンクロイツの文化史	

1. 著者名 ジョージ・L・モッセ（宮武実知子訳、今井宏昌解説）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 416
3. 書名 英霊 世界大戦の記憶の再構築	

1. 著者名 鍋谷郁太郎 / 柳原伸洋 / 梅原秀元 / 川手圭一 / 勝田由美 / 池田嘉郎 / 姉川雄大 / 今井宏昌 / 黒沢文貴 / 剣持久木	4. 発行年 2022年
2. 出版社 錦正社	5. 総ページ数 355
3. 書名 第一次世界大戦と民間人 「武器を持たない兵士」の出現と戦後社会への影響	

1. 著者名 アンドレアス・ヴィルシング / ベルトルト・コーラー / ウルリヒ・ヴィルヘルム編（板橋拓己 / 小野寺拓也監訳、今井宏昌 / 北村厚 / 狐塚祐矢訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 160
3. 書名 ナチズムは再来するのか？ 民主主義をめぐるヴァイマル共和国の教訓	

1. 著者名 山室信一編、今井宏昌 [他] 著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 232
3. 書名 人文学宣言	

〔産業財産権〕

〔その他〕

今井宏昌 - 研究者 - researchmap
<https://researchmap.jp/heero108/>

今井 宏昌 (いまい ひろまさ) - 九州大学
<http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/search/details/K006572/index.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 ベンヤミン・ツィーマン教授公開講演会 "Nachdenken ueber die Kriegsgewalt. Die deutschen Graueeltaten in der Anfangsphase des Ersten Weltkriegs"	開催年 2019年 ~ 2019年
--	----------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------